



渋川智明著

岩波新書 ¥700+税

福祉NPO 地域を支える市民起業

NPO法人が誕生し福祉分野の法人が多数を占めている。介護保険が制度実施され、そこに参入していくNPO法人も多くなっている。福祉の分野における考え方や担い手について、NPO法人の活動実践を紹介し、市民が人々の要求に応え自らサービスを創り出す過程も紹介している。市民のこれからの生活がどうあったら人として豊かに暮らせるのかを考えさせられ、福祉は金がかかるの大変なこと、というイメージを変化させてくれた。福祉は公または民のほかに共にあっても良いと柔軟に捉える人が多くなってきたというのだということを経験した団体の事例が教えてくれる。

また、市民が地域の身近な問題や課題を仲間たちで解決、達成していく能力が高くなっていることや男女、市民と行政、従来だともやもすると迷惑と思えることに対して、人間としての当たり前をキーワードに痴呆の人のグループホームを運営することなど、NPO法人制度が人の感性をも含む多

くの可能性を生み出してきたことを知ることができる。

福祉は苦手と逃げていたが、活動の様子、介護保険との関係、市民が創るサービスとページが進むにつれ、「明日はわが身」と思えてきた。「お互い助け合いながら、みんなの命を大切に生きてやるやさしい社会にしたいと、人々は切実に思い始めている。

「介護保険は生活面での援助や心のサービスは提供しない。それをするのは心を持った人々によるふれあいボランティアの活動だ」と、さわやか福祉財団の堀田さんが本文の中で言っている。そのことを主題「福祉NPO」副題「地域を支える市民起業」という観点で読んでみてNPOの持つ拡がりや深さを感じた。福祉は暗いから、いろいろ出るように切り替わった。

(文/朝川君代)

事務局 日誌

石川 雅子



秋はイベントの豊富な季節、それはコモンズも同様です。年間通しているんな事業を行っていますが、この季節は他の団体も多いため、参加者が少なくなってしまうんですね。沢山の方が参加して頂けるような内容にするのも、団体側の力量だと反省もしています。

先日、産業会館でフォーラムを開催した際、前の職場の上司(S課長)がちょっとだけ見に来てくれたんです。私がチラシを会社にFAXしておいて、会場も会社のすぐ近くだったので。久しぶり、もうずーっと会ってなかったんですよ。会社辞めてから、

2年半は経ってますから。

私が在職中に、個人的にボランティアをしていたことを一番理解してくれた方でした。初めて就職した会社で、あの課長が上司でホントに良かったと思います。恵まれてました。仕事以外でもいろんなことを教わりましたから。カチン、とくることも多々ありました。でもそれは課長も同じでしょうけど。課長はNPOの必要性を感じてくれていて、私がこの活動をしていることを喜んでくれていました。課長のためにも、この活動でもっと頑張らなくちゃ、と改めて思いました。